（6 月 29 日）「ルカによる福音書 1：39～45」
そのころ、マリアは出かけて、急いで山里に向かい、ユダの町に行った。
（ルカによる福音書 1 章 39 節）

・マリアはどうしてエリサベトのところに行ったのでしょう。彼女は長期滞在をしていることから、天使が行ったことの真偽を確かめたかっただけではないようです。また赤ちゃんが生まれる前に帰ってきていることから、出産の手伝いでもないようです。
・マリアは天使ガブリエルから告げられた喜びの知らせを、エリサベトと分かち合いたいと考えたのではないでしょうか。自分と同じように神さまの恵みを与えられたエリサベトと共に、不思議なみ業を賛美したいと思ったのではないでしょうか。
・マリアの挨拶を聞いて、エリサベトのお腹の子は飛び跳ねました。エリサベトは聖霊に満たされ、これらの出来事の意味を知ります。エリサベトが口にした「わたしの主」という言葉は、彼女の信仰告白でした。

（6 月 30 日）「ルカによる福音書 1：46～56」
マリアは、三か月ほどエリサベトのところに滞在してから、自分の家に帰った。
（ルカによる福音書 1 章 56 節）

・今日の箇所は、「マリアの賛歌」と呼ばれるものです。そのラテン語の一節を取って、「マニフィカト」とも呼ばれます。日本聖公会の祈祷書では、夕の祈りの際に用いるように定められています。
・ユダヤでは、一日は日の入り（夕方 6 時ごろ）から始まりました。つまり夕方は、終わりであり始まりでもあるのです。この「マリアの賛歌」もまた、終わりと始まりを予示しているものだと考えることはできないでしょうか。
・マリアの賛歌の後半部分では、社会的・経済的境遇の逆転が語られます。マリアは「おとめ」でした。当時の社会において、若い女性が社会や政治に関心を持つことは不可能でした。ではこれらの言葉は、何を意味するのでしょうか。神さまの思いが代弁されたのでしょうか。

福　音　書　通　読

6 月

（6 月　1 日）「マルコによる福音書 11：20～25」
はっきり言っておく。だれでもこの山に向かい、『立ち上がって、海に飛び込め』と言い、少しも疑わず、自分の言うとおりになると信じるならば、そのとおりになる。　（マルコによる福音書 11 章 23 節）

・枯れたいちじくは、エルサレム神殿を示していると言われます。イエス様が再三批判されたにも関わらず、イスラエルの人たちは耳を貸しませんでした。紀元 70 年に起こったエルサレム神殿崩壊といちじくが枯れたこととを、人々は重ね合わせたのでしょう。
・イエス様は「神を信じなさい」と語られます。「山を動かすほどの信仰」という言い方がありますが、山を動かすのはその人ではなく神さまです。神さまならきっとそうしてくださると疑わずに信じること、それが信仰なのです。
・わたしたちの教会は、その信仰の上に立っているでしょうか。信じて祈っているでしょうか。枯れたいちじくの木や崩壊したエルサレム神殿のように、なってはいないでしょうか。

（6 月　2 日）「マルコによる福音書 11：27～33」
言った。「何の権威で、このようなことをしているのか。だれが、そうする権威を与えたのか。」
（マルコによる福音書 11 章 28 節）

・「権威」という日本語には、あまり良いイメージがないかもしれません。権威とは自発的に同意・服従を促すような能力や関係のことで、威嚇や武力によって強制的に同意・服従させる「権力」とは区別されます。
・2000 年前のエルサレム神殿では、律法学者や祭司長、長老たちが「権力」を持っていました。「神の審き」をちらつかせ、「律法」によって人々を縛り付けていました。そこにイエス様がやって来ました。彼らは「何の権利があって」と憤ったのです。
・わたしたちはイエス様を受け入れるように、促されています。しかし「何の権利があって、『わたし』の人生に入って来たのか。出て行ってくれ」と拒んではいないでしょうか。

（6 月 27 日）「ルカによる福音書 1：5～25」
そこで、ザカリアは天使に言った。「何によって、わたしはそれを知ることができるのでしょうか。わたしは老人ですし、妻も年をとっています。」
（ルカによる福音書 1 章 18 節）

・ルカ福音書にはマルコ福音書にはない「イエス様の降誕物語」が記されています。また「洗礼者ヨハネの誕生物語」は、マタイ福音書にも見られません。ルカではイエス様と洗礼者ヨハネとの対比が、くっきりと描かれます。
・ここに登場する洗礼者ヨハネの父ザカリアは、祭司でした。彼と妻エリサベトとの間には、子どもがおりませんでした。当時、多くの子どもに恵まれることは神さまの祝福と考えられていましたが、子どもに恵まれないことは「恥」だと考えられていました。
・しかし神さまは、この「不妊の女性」と呼ばれていたエリサベトに、手を差し伸べられました。神さまの介入によって、物語が動き出します。しかしザカリアはすぐに受け入れることはできませんでした。

（6 月 28 日）「ルカによる福音書 1：26～38」
天使は、彼女のところに来て言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」　（ルカによる福音書 1 章 28 節）

・次に神さまは、ナザレにいるマリアの元に天使ガブリエルを遣わされます。彼女はヨセフという男性のいいなずけであり、おとめでした。二人は婚約しており、同居はしていないものの、法的には実質的な夫婦とみなされていたようです。
・結婚した後であれば、子どもができることは神さまの祝福であり喜びだったことでしょう。しかし前回のエリサベト同様、マリアにとってもこのことは、「ありえない」出来事でした。「男の人を知りませんのに」というマリアの言葉が、それを物語っています。
・神さまはこのようにマリアに関与して、救い主の誕生へと導いていきます。彼女は一人の信仰者として神さまにすべてを委ね、神さまのみ心のままに歩んでいこうと決心します。

（6 月 25 日）「マルコによる福音書 16：9～20」

婦人たちは、命じられたことをすべてペトロとその仲間たちに手短に伝えた。その後、イエス御自身も、東から西まで、彼らを通して、永遠の救いに関する聖なる朽ちることのない福音を広められた。アーメン。

（マルコによる福音書 16 章結び二）

・この 16 章 9 節以降は、後代になって書き加えられたのだと考えられています。一つは有力な写本に 9 節以降が載せられていないということ。もう一つは使われている語句や文法が大きく変わっており、同じ人が書いたとは思えないからというのがその理由です。

・なぜ 9 節以降は書き加えられたのでしょうか。それは 8 節までで終わったら、復活のイエス様との出会いが語られないことになるからです。後に編集された他の福音書の復活物語には大きなインパクトがあり、そのことも伝えなくてはと思ったのかもしれません。

・しかし「具体的な」復活物語が載せられないことによって、わたしたち「独自の」復活物語ができていくということもあるのではないでしょうか。復活物語には決まったフォーマットなど存在しないのです。

（6 月 26 日）「ルカによる福音書 1：1～4」

そこで、敬愛するテオフィロさま、わたしもすべての事を初めから詳しく調べていますので、順序正しく書いてあなたに献呈するのがよいと思いました。

（ルカによる福音書 1 章 3 節）

・今日からルカ福音書に入ります。ルカ福音書の冒頭は、献呈の辞の体裁がとられています。このような書き方は、当時のギリシア・ローマ世界の中で一般的なものでした。

・ルカ福音書はイエス様が十字架につけられてから、50 年以上経って書かれたと考えられています。「順序正しく」というのは時間的なことではなく、神さまによる救済的な意味合いで、どのように関わっていこうとされているのかを正しく伝えようとしているということです。

・また「テオフィロ」は単なる人名だと考えることもできますが、「神の友」という意味もあることから、神さまを愛するすべての人に対して書かれたと解することもできます。つまりこの書は、わたしたちに対しても書かれているのです。

（6 月　3 日）「マルコによる福音書 12：1～12」

聖書にこう書いてあるのを読んだことがないのか。『家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった。』

（マルコによる福音書 12 章 10 節）

・詩編 118 編 22～23 節にこのようにあります。「家を建てる者の退けた石が隅の親石となった。これは主の御業　わたしたちの目には驚くべきこと。」イエス様はこの詩編の言葉を引用されました。

・石造りの家を建てる際、土台の意志である「かなめ石」はとても重要なものでした。イエス様は信じる人にとってはかけがえのない隅の親石です。しかし信じない人にとっては、捨てられるもの、つまずきの石、妨げの岩となるのです。

・彼らはぶどう園の収穫を、神さまに返そうとはしませんでした。わたしたちも与えられた賜物を自分の力で得たものだと勘違いしたときに、イエス様につまずいてしまうのです。

（6 月　4 日）「マルコによる福音書 12：13～17」

イエスは言われた。「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」彼らは、イエスの答えに驚き入った。

（マルコによる福音書 12 章 17 節）

・人々がイエス様を陥れようとして言った、皇帝に税金を納めるか否かという問題は、わたしたちが思う以上に複雑な問題です。当時ユダヤはローマ帝国の支配下にあり、ローマ皇帝への税金を課せられていました。

・その税金を納めるためには、ローマの貨幣を使わなければなりません。たとえばある銀貨には皇帝ティベリウスの肖像と、皇帝が神格化されていることを示す銘が刻まれていました。その硬貨を持つことは、偶像を刻むこと、そして偶像を礼拝することにつながるのです。

・イエス様は「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に」と語られます。わたしたちが手にしているこの世的なものではなく、神さまから頂いたものに目を向け、それをどう用いているのかを考える必要があるのです。

（6 月　5 日）「マルコによる福音書 12：18～27」
復活はないと言っているサドカイ派の人々が、イエスのところへ来て尋ねた。
（マルコによる福音書 12 章 18 節）

・サドカイ派とは貴族祭司階級の人たちで、モーセ五書（創世記・出エジプト記・レビ記・民数記・申命記）の権威だけを認めていました。そのため天使の存在や死者の復活については否定していました。
・彼らは貴族で裕福であったために、復活などなくても十分だと思っていたのでしょうか。現世で十分恵まれたからそれでいいと思ったのでしょうか。彼らはそして、レビラート婚と呼ばれる制度を元に、復活信仰の矛盾点を突こうとします。
・イエス様はこの問いを聞かれて、噴き出してしまったかもしれません。しかし律法や聖書を自分の都合の良いように捉え、判断していくのは、わたしたちにも覚えがあることです。そうではなく神さまの思いは、わたしたちの想像をはるかに超えるのです。

（6 月　6 日）「マルコによる福音書 12：28～37」
イエスは律法学者が適切な答えをしたのを見て、「あなたは、神の国から遠くない」と言われた。もはや、あえて質問する者はなかった。
（マルコによる福音書 12 章 34 節）

・今日の箇所と同じような内容の物語（並行箇所）が、マタイ 22：34～40、ルカ 10：25～28 に書かれています。この三つの福音書を見比べてみると、二つの大きな特徴がマルコ福音書には見られます。
・マタイとルカに出てくるのは律法の専門家でマルコ福音書は律法学者。それは大した違いではありません。ところがマタイ・ルカが「イエスを試そうとして」質問しているのに対し、マルコ福音書の律法学者はそのような考えを持っていません。
・さらにイエス様は適切に答える律法学者を見て、「あなたは、神の国から遠くない」と褒めます。彼はイエス様に、神を愛し、隣人を愛することはすべてのことに優ると答えました。そのことこそが、神さまの望まれていることなのです。

（6 月 23 日）「マルコによる福音書 15：42～47」
ヨセフは亜麻布を買い、イエスを十字架から降ろしてその布で巻き、岩を掘って作った墓の中に納め、墓の入り口には石を転がしておいた。
（マルコによる福音書 15 章 46 節）

・イエス様が十字架上で息を引き取ったとき、弟子たちはその近くにはおりませんでした。ローマでは死刑を執行された犯罪人の遺体は、家族や親戚、友人などに渡すことになっていました。しかしペトロたちの姿はそこにはありませんでした。
・イエス様の遺体は、アリマタヤのヨセフが引き取りました。彼は議員ですから、それなりの地位にいました。（マタイ福音書では「金持ち」、ルカ福音書では「善良な正しい人」と書かれています）。
・彼は意を決し、ピラトに願い出ます。自分の身分が危うくなることなど考えず、自分ができることをイエス様のためにおこないました。そしてマグダラのマリアとヨセの母マリア（多分イエス様の母マリア）はずっと、お墓の方を見つめていました。

（6 月 24 日）「マルコによる福音書 16：1～8」
婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。
（マルコによる福音書 16 章 8 節）

・今日の箇所の小見出しには「復活する」と書かれています。しかしここにはイエス様は登場しません。その代わりに白い衣を着た若者は女性たちに「ガリラヤで会える」と告げます。ガリラヤとは、人々が生活する場所です。人々の日常です。
・その言葉を、若者は弟子たちとペトロに伝えるようにと、女性たちに言います。イエス様を見棄て、逃げ出し、否認した弟子たちを招かれているのです。弱さの中から抜け出すことのできない一人ひとりに、声を掛けられるのです。
・マルコ福音書は元々、この 16 章 8 節で終わっていたと考えられています（理由は明日）。「震え上がり、正気を失っていた」、「恐ろしかったからである」。これが本来の復活物語でした。復活のイエス様との出会いは、人それぞれ違います。それぞれの復活物語がここから始まるのです。

（6 月 21 日）「マルコによる福音書 15：21～32」
そこへ、アレクサンドロとルフォスとの父でシモンというキレネ人が、田舎から出て来て通りかかったので、兵士たちはイエスの十字架を無理に担がせた。（マルコによる福音書 15 章 21 節）

・キレネ人シモンの息子二人（アレクサンドロとルフォス）の名前が聖書には載せられています。彼らは初期の教会においてよく知られていた人物なのでしょうか。彼らの証言によっても、イエス様の十字架は証明されているのでしょうか。
・イエス様は没薬混ぜたぶどう酒を飲むのを拒否されます。苦痛を和らげるために麻酔薬としてその飲み物は与えられますが、イエス様は飲まれません。イエス様は最後まで、苦しみをそのまま受けられるのです。
・そしてイエス様は、二人の罪人と共に十字架につけられました。罪人の一人として数えられ、苦しみを受け、人々からののしられました。すべての人がイエス様を見棄てました。そして静かに時は過ぎていきます。

（6 月 22 日）「マルコによる福音書 15：33～41」
三時にイエスは大声で叫ばれた。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。（マルコによる福音書 15 章 34 節）

・伝統的に十字架上のイエス様の言葉は「七聖語」としてまとめられています。しかしルカとヨハネには 3 つずつの言葉が記されていますが、マタイとマルコには 1 つだけです。そしてその 1 つが、この 34 節です。
・イエス様は人々に見棄てられました。そして今、神さまは沈黙しておられます。しかしその苦痛の中でも、イエス様は神さまから離れず、むしろしがみつこうとされているように思います。
・イエス様が息を引き取ったときに、百人隊長は「本当にこの人は神の子だった」と言います。百人隊長はいわゆる「異邦人」でした。この信仰告白は、マルコ福音書の読者を、そしてわたしたちを代表してなされているのではないでしょうか。

（6 月　7 日）「マルコによる福音書 12：38～13：2」
イエスは、弟子たちを呼び寄せて言われた。「はっきり言っておく。この貧しいやもめは、賽銭箱に入れている人の中で、だれよりもたくさん入れた。」（マルコによる福音書 12 章 43 節）

・律法学者は、「人から見てどう見えるのか」をとても大切にしていたようです。長い衣をまとうことで自分は偉いのだとアピールし、広場で挨拶されることによって自分が特別な人間であると人々に知らしめました。
・また上席に座ることで人々の尊敬を集め、長い祈りでありがたみを増していました。ちなみに祈りを長くすることで、祈祷料も多く要求していたようです。
・それらは神さまの目から見たら、まったく意味のないものです。レプトン銅貨 2 枚（現在の価値で 130 円くらい）であっても、持てるすべてを投げ入れたやもめの献金に、神さまは目を留められるのです。

（6 月　8 日）「マルコによる福音書 13：3～13」
引き渡され、連れて行かれるとき、何を言おうかと取り越し苦労をしてはならない。そのときには、教えられることを話せばよい。実は、話すのはあなたがたではなく、聖霊なのだ。（マルコによる福音書 13 章 11 節）

・ユダヤ戦争が起こり、エルサレム神殿が崩壊した頃にマルコ福音書は書かれたと言われています。人々は信仰の拠り所を失い、戦争や地震や飢饉の中で世界の終わりを想像し、不安の中で動転していました。
・しかしイエス様は、それらのことは「産みの苦しみの始まりである」と言われます。決してそのようなことは小さなことだと言われているのではありません。どんなに苦しいことがあっても「わたしが共にいる」と約束されているのです。
・神さまはわたしたちを驚くような場所で用いられるかもしれません。しかしどんな場所でも恐れることはありません。なぜならわたしたちは一人ではありませんし、聖霊がわたしたちの口を通して語るからなのです。

（6 月　9 日）「マルコによる福音書 13：14～23」
「憎むべき破壊者が立ってはならない所に立つのを見たら――読者は悟れ――、そのとき、ユダヤにいる人々は山に逃げなさい。
（マルコによる福音書 13 章 14 節）

・「憎むべき破壊者が立ってはならない所に立つ」という言葉を悟れと言われても、現代に生きるわたしたちには難しいことです。しかし当時のユダヤの人々の心には、「ああ、あのことか」と誰もが思い出す出来事がありました。
・紀元前 168 年、ユダヤは当時アンティオケアに支配されていたのですが、その王はユダヤ教を禁止するだけではなく、エルサレム神殿の中にオリンピアのゼウス像を立てさせたそうです。人々はこの像を「荒廃をもたらす憎む(忌む)べきもの」と呼びました。
・そして紀元 40 年ごろ、ローマ皇帝のカリグラが自分の像をエルサレム神殿に建てようとしました。イエス様が十字架につけられてから 10 年も経たずに起こったこの出来事は、人々にイエス様の言葉を思い起こさせたことでしょう。

（6 月 10 日）「マルコによる福音書 13：24～32」
それと同じように、あなたがたは、これらのことが起こるのを見たら、人の子が戸口に近づいていると悟りなさい。
（マルコによる福音書 13 章 29 節）

・マルコによる福音書 13 章は小黙示録と呼ばれます。ここには終末の出来事が数多く書かれており、新興宗教や一部の教派はこの箇所やヨハネ黙示録、ダニエル書などを強調して人々の不安をあおることがあります。
・しかし「人の子」がやってくる本当の目的は、「滅ぼす」ことではなく「選ぶ」ことにあります。ウィリアム・ハントが描いた「世の光」という絵画があります。戸口に立つイエス様がずっと戸を叩き続けている絵です。
・その戸は、わたしたちの心です。そしてその戸には、内側にしかノブがありません。ずっと戸を叩くイエス様を招き入れるためには、わたしたちがそのドアノブに手を掛け、回さないといけないのです。

（6 月 19 日）「マルコによる福音書 15：6～15」
さて、暴動のとき人殺しをして投獄されていた暴徒たちの中に、バラバという男がいた。
（マルコによる福音書 15 章 7 節）

・ここでバラバという人物が登場します。彼の名はマタイ福音書では「バラバ・イエス」となっていましたが、マルコでは「バラバ」としか書かれていません。
・もし名前がバラバ・イエスだったとしても、彼は神さまの愛を伝えていたイエス様とは違い、暴徒、つまり革命や反乱を起こそうとしたり、人々を暴力へと先導したりする人物でした。
・それなのになぜ、群衆はイエス様を「十字架につけろ！」と叫んだのでしょうか。群集心理なのでしょうか。もはや冷静に物事を判断する心がなくなってしまったのでしょうか。あなたがその場にいたならば、どうしていたでしょうか。

（6 月 20 日）「マルコによる福音書 15：16～20」
このようにイエスを侮辱したあげく、紫の服を脱がせて元の服を着せた。そして、十字架につけるために外へ引き出した。
（マルコによる福音書 15 章 20 節）

・兵士たちは様々な方法でイエス様を侮辱します。紫は位の高い人が身につけていた色でした。聖公会の主教も紫のクラジーシャツを着ますし、宗派によってはお坊さんも高僧しか着ることのできない色でした。
・そしてイエス様は、金の冠ではなく茨で編んだ冠をかぶせられました。この侮辱に対しても、イエス様は逆らうことなく何も言われませんでした。
・イザヤ書 50 章 6 節に、このような預言があります。「打とうとする者には背中をまかせ
ひげを抜こうとする者には頬をまかせた。顔を隠さずに、嘲りと唾を受けた」。この預言が今、成就したのです。

（6 月 11 日）「マルコによる福音書 13：33～14：2」
だから、目を覚ましていなさい。いつ家の主人が帰って来るのか、夕方か、夜中か、鶏の鳴くころか、明け方か、あなたがたには分からないからである。
（マルコによる福音書 13 章 35 節）

・「目を覚ましていなさい」、このようにイエス様は命じられます。退屈な説教を聞いている中でこのように言われると、とても苦痛です。太ももをつねったり、お昼ご飯は何にしようかと思い巡らせたり、必死でまぶたが落ちてくるのを我慢します。
・しかしクリスマスイブの夜、小さな子どもたちは「眠りなさい」と言われても起きていようとします。クッキーやミルクやニンジンを用意して、何とかサンタさんに会おうとします。（結局は眠ってしまいますが…）
・「目を覚ましていなさい」という言葉を、わたしたちは苦痛を伴うものとして受け入れるのでしょうか。それとも「イエス様が来て下さる！」というワクワク、ドキドキの中で聞くのでしょうか。

（6 月 12 日）「マルコによる福音書 14：3～11」
イエスは言われた。「するままにさせておきなさい。なぜ、この人を困らせるのか。わたしに良いことをしてくれたのだ。」
（マルコによる福音書 14 章 6 節）

・当時、食事の席には基本的に男性しかいることができませんでした。また食事は左手を下にして寝そべった状態でおこなっていたようです。頭は内側に、そして足は外側に投げ出されていました。
・そこに突然女性がやってきて、イエス様の頭に香油をかけたわけです。人々は驚き、憤慨しました。食事の邪魔をされたからだけではありません。その香油がとても高価な物（現在の価値で約 300 万円）だったからです。
・彼女は「今できること」を精一杯おこないました。わたしたちはその場にいて憤慨し、批判した人たちのように、彼女のおこないを排除するのでしょうか。

（6 月 17 日）「マルコによる福音書 14：53～65」
祭司長たちと最高法院の全員は、死刑にするためイエスにとって不利な証言を求めたが、得られなかった。
（マルコによる福音書 14 章 55 節）

・聖書の中には「敵対者」と呼ばれる人たちが登場します。彼らにとってイエス様は邪魔者でした。どうしても殺さなければならない人物でした。彼らが自分たちの宗教を守り、自分の地位を揺るぎないものにするには、イエス様がいてはいけなかったのです。
・最高法院（サンヘドリン）は 71 人で構成させ、少なくとも 23 人の賛成がなければ死刑のような重大な決定は出来ないはずでした。しかしイエス様が逮捕された夜間は、議場に入るための門は閉ざされていたと思われます。
・さらに死刑が問題になっている裁判は夜間に開催してはならず、判決の確認を取るために翌日に二回目の公判が必要でした。被告の弁護すらないこの裁判は、イエス様を死刑にしたい敵対者の気持ちの表われなのでしょう。

（6 月 18 日）「マルコによる福音書 14：66～15：5」
するとすぐ、鶏が再び鳴いた。ペトロは、「鶏が二度鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」とイエスが言われた言葉を思い出して、いきなり泣きだした。
（マルコによる福音書 14 章 72 節）

・聖公会の聖餐式では、説教のあとにみんなでニケヤ信経を唱えます。その中に「ポンテオ・ピラトのもとで、わたしたちのために十字架につけられ、苦しみを受け、死んで葬られ」という言葉がありますが、果たして十字架の責任をピラトだけに押し付けてよいのでしょうか。
・一番弟子ともいえるペトロの三度の否認は、わたしたちも誘惑に負け、イエス様を見捨て、十字架へと向かわせる一人となることを示しています。
・ペトロはいきなり泣き出しました。この言葉には、様々な意味があります。頭を覆って、地に身を投げ出して、上着を着て、走り出して、勢いよく、わっと。しかしそんなペトロを、イエス様は用いていかれます。これがわたしたちに対する、恵みの約束なのです。

（6 月 13 日）「マルコによる福音書 14：12～21」
一同が席に着いて食事をしているとき、イエスは言われた。「はっきり言っておくが、あなたがたのうちの一人で、わたしと一緒に食事をしている者が、わたしを裏切ろうとしている。」　（マルコによる福音書 14 章 18 節）

・イエス様は逮捕され、十字架につけられる直前に、過越の食事を弟子たちと共にされます。その場所をイエス様は、不思議な方法で確保されます。すべてのことは神さまが備えられたということなのでしょう。
・食事のときに、イエス様は「はっきり言っておくが」と言われます。これは「アーメン、わたしはあなたがたに言う」と訳すことができる言葉です。とても大事なことを言われるときに、イエス様は「アーメン～」と語られます。
・「自分を裏切る者がいる」、それはイエス様を死に引き渡すということです。しかし弟子たちは誰一人として、「いえ、わたしはそうではありません」とは答えることができませんでした。「あなたはどうだ？」その問いかけを、イエス様はわたしたちにもされています。

（6 月 14 日）「マルコによる福音書 14：22～31」
一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えて言われた。「取りなさい。これはわたしの体である。」　（マルコによる福音書 14 章 22 節）

・イエス様が十字架の直前に弟子たちと囲んだ食卓は「最後の晩餐」と呼ばれ、今もキリスト教会では大切にされています。裂かれるパンはイエス様を想起させ、その体と血によって生かされていることを思い起こさせます。
・この食事の場には、イエス様を売り渡すイスカリオテのユダもいました。イエス様はユダが裏切ることを知っていましたが、ユダを含む「皆」が杯から飲みました。すべての人が、食卓の交わりに加えられたのです。
・そしてイエス様は、「神の国で飲む時までぶどうの実から作ったものを飲むことはしない」と言われます。その言葉は、「神の国でいつの日か、あなたたちと祝宴をあげよう」と言われているようにも聞こえます。その祝宴に、わたしたちも招かれるのです。

（6 月 15 日）「マルコによる福音書 14：32～42」
誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い。」　（マルコによる福音書 14 章 38 節）

・イエス様は弟子たちの見ている前で、悲しみを打ち明けます。人間の痛みや苦悩をわたしたちと同じように感じられるイエス様だからこそ、わたしたちの悲しみにも寄り添ってくれるのです。
・そしてイエス様は「アッバ」と神さまに呼びかけます。「アッバ」は幼児語で父を指す言葉ですから、「おとうちゃん」という感じでしょうか。当時の人々は、神さまの名前すら呼ぶことができませんでした。しかしイエス様は、神さまとの親しい関係を示されます。
・その場でイエス様は弟子たちに、目を覚ましているように願いますが、弟子たちは三度も眠ってしまいます。何度もつまずく弟子たちを、しかしイエス様はお見捨てにはなられませんでした。

（6 月 16 日）「マルコによる福音書 14：43～52」
イエスを裏切ろうとしていたユダは、「わたしが接吻するのが、その人だ。捕まえて、逃がさないように連れて行け」と、前もって合図を決めていた。
（マルコによる福音書 14 章 44 節）

・ついにイエス様は逮捕されます。ゲツセマネの祈りの後、ユダは剣や棒を持った群衆と一緒にやってきました。しかしイエス様は、逃げようとはされませんでした。静かに逮捕されるのを待っているようです。それが神さまのみ心であることを、イエス様はご存じでした。
・この逮捕の場面ですが、マタイやルカと比較するととても淡々と進んでいくことに気づかされます。イエス様がユダに声を掛けることもないし、剣を使った人に対する言葉もありません。ただ静かに、十字架への道を進んでいかれます。
・唐突に一人の若者が登場します。彼はマルコ福音書にしか出てきませんが、一体誰なのでしょう。マルコ自身だという説もあります。しかし大切なイエス様を見捨て、逃げるために亜麻布すら手放すその人物は、わたしやあなたの姿なのかもしれません。